



美術館だより

☎(63)7788

爽やかな日本画

伊藤 彰 耳展

4月6日(木)～5月29日(月)



「十二神将・辰」

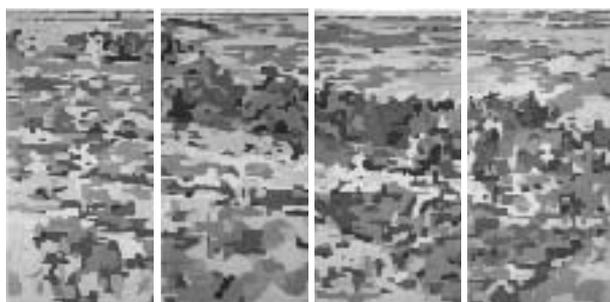
伊藤彰耳画伯は、日本美術院で活躍する日本画家です。

若いころ、京都の三十三間堂に通い、十年間も仏像の写生を続けました。温もりのある生身の人間を描きたいと考えていたところ、あるお坊さんに仏像を描いてみることを勧められたのがきっかけでした。

このころの作品は、端正な写生による写実的なものです。ものを言わない仏像が何かを語りかけてくるかのような静かな迫力を感じます。

1991年のニューヨークでの個展を機に仏像をテーマとした作品に一度終止符を打ちます。その後、阿蘇の大自然に接するうちに、画面はどんどん明るくなってきました。岩絵具の鮮やかな色を、画面に生かそうと同じ色を何度も重ね塗りをして、澄んだ明るい色彩を生み出していったのです。独特の優しい趣のある美の世界を求め続

けている伊藤画伯の作品は、きっと見る人を安らぎの境地に誘いこむことでしょう。



「風が緑になる(阿蘇北外輪)」

～美術の話を聞きに来ませんか～
ギャラリートーク

伊藤彰耳画伯を迎えて

【日 時】4月11日(火)14:00
4月16日(日)10:00

【場 所】湯河原ゆかりの美術館展示室

【テーマ】「伊藤彰耳展」
作品解説

【講師】当館学芸員

【参加料】入館料のみ

休館日 毎週水曜日、4日(火)展示替えのため
開館時間 9時～16時30分(入館は16時まで)
町民の方は受付で町民証の提示をお願いします。
毎月第3日曜日の家庭の日は、町民の方は入館無料です。

入館料 円

小中学生	大人	一般	割引券	町民
300	600	600	500	400
200	500	500	400	400
200	400	400	400	400

一喜一憂

東京国際女子マラソンで優勝した高橋尚子選手。

ゴール後、「今後どうしますか」のインタビューに、「走るという新しい時間が始まるだけです」と答える笑顔がとて新鮮に映りました。

今日から新年度。行政に取り組む新しい時間の始まりです。

十年ぶりにマイナスに歯止めがかかった税収も、国から地方への財政負担増により、厳しい予算編成となりました。

三役はもとより職員給与削減、諸経費を節約し、小学校の耐震化、児童手当、介護支援、防災をはじめとする生活環境整備と、新しいまちづくりの第一歩となるスローフード大学院創設に向けた、安全で安心、そして、将来に夢を託す事業に重点的に予算を配分いたしました。

二〇〇六年は、地方自治体の姿が大きく変わる重要な年となります。

国と地方の財政構造を分権社会にふさわしくするための三位一体改革は、交付税を制約、補助金は削減する、国の苦しい財政のありを直接受けています。親の収入が減れば、子どもの小遣いが減るのは当然ですが、国県の仕事の町への肩代わりは、これからも続きます。住民と直接つながる仕事は、国・県より町が行う方がサービスの内容は充実します。けれどもそれに見合う税源の移譲は期待できません。仕事

量を増やし、お金は減らすでは、町を泣かせるだけです。国の関与をなくさない限り、地方の自主性はなく、市町村はささやかな自由を得る一方、役割と責任の大きな負担を背負うこととなります。

国や県から一律に補助金が交付される時代は終わり、独自の発想で予算を獲得する自治体間競争時代。

町村長で構成する町村会も、もはや「仲良し集団」ではなく、生き残りかけた激しいしのぎあいが、見え隠れするようになりました。

実力主義に対する違和感は全くないほど、職員の意識改革は確実に定着していると思っていますが、次々に前例のない行政課題が発生する昨今、住民生活と深く関わる職員は、町民の皆様が生活するために役立つ理論と知識を常に身につけておかねばなりません。そのため能力、実績、接客対応等基礎的な問題から企画力、判断力、指導力、責任感まで幅広い人事評価を、部課長以下全職員を対象に行い、年功序列型から実力中心型に移行してまいります。

新たな事業を展開するには勇気がいります。何もしない方が批判も避けられ、しかも気楽かもしれません。しかし、町の衰退は、行政の責任であると捉え、自分を大切にすることを捨て、職員とともに新しい施策に積極的に取り組んでまいります。

町長

米岡幸男

